
連合警備隊冒険者管理局遺品回収課

大介丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連合警備隊冒険者管理局遺品回収課

【Nコード】

N4184I

【作者名】

大介丸

【あらすじ】

迷宮や遺跡内の探索でへまをして朽ち果てるある冒険者達の遺品を回収して回っている、ある警備隊員の話

1話：救援要請

命知らずな冒険者達が命懸けの探索と闘いが繰り広げられている地下迷宮　・・・地下10階付近。

暗くひんやりとした空気と血の匂いが漂っている迷宮の通路付近を2人の冒険者らしき人影があった。

しかし、その2人の人影の装備は、一般の冒険者とは何処か違う。漆黒のボディーアーマーを着用し、頭部、顔面、頸部を保護するためか目出し帽とフリッツヘルメットを着用している。そのため、どのような表情をしているのかわからない。

ヘルメットには、マイクとヘッドホンが内臓され、ボディーアーマーの上には、アサルトベストを着用している。ベストには予備用の弾薬、携帯用回復薬用のポーチなどが付いている。

左肩には、縫製ラインから1センチほど下に所属する部隊章らしきものをつけている。丸い円の中には口に剣を銜えた猟犬の絵柄があり、上部には絵柄を丸く囲むように「ポトリシヤス大陸連合警備隊冒険者管理局遺品回収課」と書かれている。それが彼が所属している部隊名なのだろう。そのためかほかはわからないが拘束具のたぐいは持っていない　この世界の迷宮や遺跡で活動する冒険者は、彼等が所属するポトリシヤス大陸連合警備隊冒険者管理局に登録しなくてはならない。

ポトリシヤス大陸連合警備隊冒険者管理局は、従来の犯罪者や治安維持の任務とは違い、主に、迷宮内や遺跡内での冒険者による犯罪行為を取り締まる任務と迷宮や遺跡内で朽ち果てた

冒険者の遺品と冒険者認識票を回収する事である。

認識票の形状や材質、打刻される冒険者の情報は各国の警備隊支部によって異なる。多くは5cm程度の大きさの特殊魔術をかけられ

ているアルミニウム製やステンレス製で、氏名、生年月日、性別、血液型、種族、認識番号、信仰する宗教等が打刻されている。残念ながら遺体までは回収する事は不可能だが、特殊魔術のかかった認識票は、迷宮や遺跡内で放置していてもなくなる事はない。冒険者の死骸は迷宮や遺跡内にいる魔物に何もかも喰われてなくなるが・・・。

その回収作業を行う時は、従来の冒険者の様に6人編成で迷宮や遺跡内を動き廻るのではなく、2人一組で行動をする。

その2人の職員の付近には、死骸が転がっていた。

この地下迷宮で無惨に命を散らした冒険者パーティーと半獣人系、昆虫系、精霊系の魔物の死骸だ。

床には血だまり、大便と肝汁の臭いがぶんぶんしている所を見ると、数時間前に凄まじい戦闘があったようだ。

一体の半獣人系の魔物の貌は、1人の冒険者の喉元に埋められている。

半獣人系の魔物は頭部を破壊される前に冒険者の喉元を食いちぎっている。死体の上の壁を飛び散った頭蓋骨と脳が飾っている。その壁に血文字で「俺達は終わった。だが俺達は折れた剣の端を握って戦うつもりだ」

と書いてある。最後の力を振り絞って書いたのだろう。

2人の職員のうち、1人が死体を手慣れた様子で調べ冒険者認識票と遺品となる装身具など回収する。どれもこれも、血塗れである。

もう1人は付近を警戒する。

「慌てなくていいぞ」

警備隊が支給している拳銃を周囲に向けて、付近を警戒している職員が掠れた声で言う。

「急げって言うているように聞こえるよ」

魔物と冒険者の肉片と血だまりの中を何処か陽気な声で、手慣れた動きで

遺品回収作業している職員が言う。並大抵の精神力では出来ない作

業だ。

人と魔物の内臓や肉片の中を、冒険者認識票と遺品となる装身具を回収する事は

「（本部より「戦狼」へ……応答せよ……）」

内臓されヘッドホンから雑音と共に声が聞こえてきた。「戦狼」とは、彼等のコールサインだろう。

「こちら「戦狼」」

掠れた声で返答しながら、周囲を警戒する。

「（……処理終え次第……至急地下10階西側へ移動されたし……）」

「西側には……「ハリコン」が回収処理を行っているんじゃないのか？」

回収作業を終えた職員が怪訝な声で言う。

「ハリコン」とは、この階層で同じように回収作業処理をしている職員のコールサインだろう。

「（「ハリコン」より……緊急救援要請あり……至急救援に向かわれたし……状況によれば……「重火器」、「攻撃呪文」、「特殊能力」の使用を許可する……）」

「了解。現場に向かう」

掠れた声で職員が言う。

「やれやれ……んじゃ、救援に向かいますか。しかし、「能力」の使用許可を下りるとなると、まずい状況じゃないのか？ベルナルド」

陽気な声の職員が、ベルナルド　もう1人の職員の名前だろう　に尋ねる。

「ああ。急ごう。ラインヴァルト。緊急救援要請となれば……それなりにまずい状況のはずだ。で、回収は終わったのか？」

「終わった。これでここで死んだ冒険者も少しは浮かばれるかもしれない」

ラインヴァルト

陽気な声の職員の名前だろう

が冒

険者の死骸に向けて警備隊式の敬礼をする。それが唯一の迷宮などで命を散らした冒険者に向けての敬意の表し方なのだろう。

「 彼等にすれば、並の人生が苦痛であり恐怖だ。冒険者として死ぬ事も覚悟していたはずだ 向かう前にラインヴァルト、お前の「能力」を使用しろ」

ベルナルドが告げる。

「 あいよ」

陽気に答えると、前に右手を延ばす。静寂と血の匂いが充満する薄暗い空間に歪みが発生した。ちりちりと焦げるような電流が空間一帯に広がる。

空間が陽炎のように揺れて弾けた。ぶれるような残像が、一つの物質を結像させるまで、一瞬の時間もかかっていない。

現れた物は

この世界では製造しているのか、もしくは存在しているのかも不明な、観たことも聞いたこともない狙撃銃が出現した。

全長は1、3メートルほど。機関部は通常より倍ほどある。大口徑弾を使用するのは明白な、龍、悪魔系の大型魔物専用の長距離自動装填方式特殊スナイパーライフルだ。人間に用いたら、文字通り打ち砕く性能がある。

「 これがあれば、どんな魔物でも秒殺さ」

ラインヴァルトが陽気な声で言う。目出し帽の下ではナイフの様な研ぎすました笑みでも浮かべている事だろう。

「・・・この大陸の「銃使い」は、お前みたいな性格なのだろうか、考えたくなるが後にしよう。それと、俺達の任務は、魔物の殲滅ではない。

冒険者の遺品と迷宮内や遺跡などで犯罪行為をする冒険者を取り締まる事だ 行くぞ」

「 なんか心に傷をつけられるような台詞だな。それ。それにそっちだつて「劔使い」じゃないか・・・まあ、そんなことわかってるつて。「冗談を言ったただけだよ、戦友」

2人は、薄暗い迷宮の通路を音も気配を消して小走りに走り出した
一刻も早く救援するために。

1話・救援要請（後書き）

初の連載です。とりあえず3話ぐらいまで書いてみます。
駄文ですが、感想いただければ嬉しいです

2話：支援攻撃

地下10階西側付近では、コールネーム「ハリコン」の職員2名が、奇獣系の魔物と半獣系の魔物の群れに襲われていた。

「畜生！！、後から後からゴキブリのように出てきやがって！！」

こっちは任務上交戦は禁止されてるんだっ！！」

空になった弾倉と薬室に素早く装填し、猛り狂う咆哮を発して今にも飛び掛かって来ようとした半獣系の魔物に向けて、銃を吠えさせる。その魔物は派手な血飛沫と奇声を発して床に転がる。

彼等の所屬している警備隊冒険者管理局は、迷宮内や遺跡内の魔物との交戦は禁止している。目的は魔物の殲滅ではなく、あくまで迷宮や遺跡内で朽ち果てた冒険者の認識票と遺品の回収、そして冒険者による犯罪行為を取り締まる任務

迷宮や遺跡に探索する者を襲い金儲けする追い剥ぎや無法者の討伐が任務である。そのためかどうかかわらないが、本格的な探索や魔物退治などは、好き好んで危険な迷宮や遺跡を探索する冒険者に任せている。

この職員2名も、漆黒のボディーマーを着用し、頭部、顔面、頸部を保護するためか目出し帽とフリッツヘルメットを着用している。

「キンドル、本部に救援要請をしろっ！！、あまりも数が多すぎるっ！！」

「了解っ、そっちも弾丸がある限り撃ち続けよっ、ピット」
発砲している職員がピットと言う名前で、本部に救援要請を出そうとしている職員がキンドルと言う名前なのだろう。

「こちら「ハリコン」、本部、応答されたし！！」

「（こちら・・・本部・・・「ハリコン」・・・どんな状況だ？」
ヘルメットに内臓されたヘッドホンから、雑音混じりの声が聞こえてくる。

「地下10階西側付近にて大多数の魔物と交戦発生っ!!、繰り返すっ、地下10階西側付近にて大多数の魔物と交戦発生っ!、応援を寄越してくれっ!」

キンドルは悲壮じみた声で告げる。

「(了解・・・「ハリコン」・・・そのまま交戦を続ける・・・)

」

「了解、以

」

キンドルがそう言い終えたとき、発砲中のピットから絶望的な悲鳴が聞こえた。

「ピットっ、どうし

」

キンドルは悲鳴の上げた相棒を見て驚愕する。ピットの貌に8本の触手と、長い尾を持つ奇獣系の魔物が張り付いていた。引き剥がそうとしても長い尻尾を首に巻きつけてくるためか、剥がそうとしてもできない。

ピットはしばらく床をのたうち回っていたが、その動きを止める。

長い尻尾が首をきつく締め付けて、仮死状態にしたのだろう。キンドルは、ピットに近づいて身体をゆする

「をいっ!!、ピット!!、しっかりしろっ」

長い尾を持つ奇獣系の魔物を剥がそうとしても、その張り付く力は凄まじいほど強く、皮が剥げそうになる。ピットは罵り声を上げる。

「「ハリコン」より本部っ、「ハリコン」より本部っ!!、職員一名が戦闘行動不能、繰り返す、

職員一名が戦闘行動不能!!。地上に医療班を待機させてくれっ」

「(本部より・・・「ハリコン」・・・、症状は・・・?)」

「奇獣系の魔物が貌に張り付いているっ、剥がそうとしても凄まじいほどの張り付く力がある。ここでは応急手当もできないっ」

半獣系の魔物に向けて、銃を発砲しながらマイクに向けて言う。

「糞っ、これじゃあ、まったくきりがなしっ、本部、聞こ

えるかっ?、至急 魔術管制室に繋いでくれ」

「(本部、了解した。以上。)

」

ヘッドホンから、しばらく間を空けて返答が返ってくる。どうやら別の担当部署に連絡をしているようである。

「（……こちら……魔術管制室。了解……状況を説明してくれ……）」

やはり雑音混じりの声が聞こえてくる。

「識別迷宮ナンバー「00-128」迷宮内、地下10階西側付近にて遺品回収事案中、大多数の魔物の襲撃を受けた！！、現在交戦中！！、および職員一名戦闘行動が不能。ただちに魔術支援を要請するっ！！！」

怒鳴るように告げながら、空になった弾倉を抜き、新しく弾倉を詰め替える。

「（了解……「ハリコン」……）」

魔物の群れが、一端動きを止めたのを見計らって、アサルトベストから迷宮内の地図を取り出す。

「魔術管制室、聞こえるかっ！？、射程座標位置番号は「1-429-1」だ！！、繰り返し、繰り返し、射程座標位置番号は「1-429-1」だっ！！！」

「（魔術管制室より……「ハリコン」……了解……これより……魔術支援を開始する。以上）」

その広い室内には、家具らしきものはなく、室内の端の方に幾つかの機材らしきものと中型のテーブルが設置されている。

室内のほぼ中央の床には、魔法円が描かれている。円の中には五芒星と何やら古代文字らしきものも書かれているが、魔術専門家の者しか読めないだろう。

室内用の電話らしき機材に、白いつなぎ服を着込んだ男性が向かって、「了解した」と報告していた。

白いつなぎ服の背中には、「ポトリシヤス大陸連合警備隊冒険者

管理局魔術師課」と書かれている。

白いつなぎ服を着込んだ男性は、警備隊の職員のようにだが何処か何かが違う。何処がどう違うのかはわからないが、一般人が見慣れた職員と何か違う。

その男性には、いかにも警備隊と言う臭いが無い。そう言っても、貴族、王族、商人、騎士、冒険者、軍人、傭兵、遊び人、盗賊、鍛冶屋、神父　この大陸、いや、この世界にいる全ての職業関係者にも当てはめる事もできない。臭い言って良いのだろうかかわからないが、まったく知らない臭いを持つ男性職員だ。その男性は電話から離れると、魔法円の外にいる魔術師用の漆黒のフード付きコートを羽織っている職員を見る。

「ヨハンセン魔術師、魔法支援要請です」

白いつなぎ服の男性は　ヨハンセン　それが魔術師用の漆黒のフード付きコートを羽織っている職員の名前であろう

に告げた。そのフードの背中にも「ポトリシヤス大陸連合警備隊冒険者管理局魔術師課と書かれている。本を読んで待機していたのだろう。本を閉じると床に置く。

「了解した。状況は？」

ヨハンセンは静かに尋ねながら、魔法円の中に入る。

「識別迷宮ナンバー「00-128」迷宮内、地下10階西側付近にて職員が魔物と交戦中。職員が一名

戦闘行動不能と言う事です」

とつなぎ服男性が答える。

「射程座標位置番号は？」

「1-429-1です」

「了解した　これより転送支援魔法攻撃を開始する」

右手の掌を上に向けて、ヨハンセンはゆっくりと呪文の詠唱を始めた。

ゆっくりと、ゆっくりと……ここに魔術師専門家が居れば、驚愕することだろう。

転送魔法の呪文詠唱と攻撃魔法の詠唱呪文を、ほぼ同時に唱えているのだ。

この職員の魔術師レベルが並大抵では無いのか、それとも魔法円の影響か

呪文の威力をギリギリまで引き上げる。魔法円も魔力に共鳴するかのように青白く光り出す。

やがて、ヨハンセンの掌に炎の固まりが回転して出現する。

魔法円を中心に、広い室内の空間に歪みが発生し、ちりちりと焦げるような電流が空間一帯に広がる。空間が陽炎のように揺れているのがわかる。

炎の固まりが、何者かに蹴り上げられるかのように、陽炎のように揺れている空間に吸い込まれていくと、しばらくして青白く光った魔法円も空間の揺れも収まる。

「・・・転送支援魔法攻撃を終了した。要請した戦友が射程座標位置番号を間違えていなければいいが」

ヨハンセンは呟く。射程座標位置番号に正確に攻撃魔法だけを転送する事は出来るが、要請した職員が

射程座標位置番号そのものを誤っていれば、その誤っている場所には転送できない。現に、誤って射程座標位置番号を告げる職員もいる。最悪なケースは、極限の状態に置かれている職員が、自分たちがいる射程座標位置番号を告げる事だ。そうなった時は・・・もはや神に祈るしかできない。

この事故の殉職者も後を絶たない。

「・・・そこまで気になさらない方がいいかと。我々魔術師課の任務は、主に射程座標位置番号に転送魔法攻撃を実行するだけです」

「射程座標位置番号位置を知っていることと、そこに転送魔法攻撃を実行する覚悟は違う。」

本官は、本官の唱えた呪文で戦友が殉職する事には耐えられない」

地下10階西側付近で交戦中のコールネーム「ハリコン」の職員、キンドルが空になった弾倉を交換している。

付近には、一行に数を減らした様子がなさそうな、奇獣系の魔物と半獣系の魔物の群れの姿がある。

「畜生っ、畜生っ！！」

もう限界かとキンドルは覚悟した。救援も未だに来る気配がなく、支援魔術攻撃の気配もない。

前方から、金切り声を上げて襲いかかろうとしている奇獣の魔物の姿がある。鎧を噛み割る強力な顎を持った昆虫だ。銃弾を浴びせるが、傷を受けた様子はない。堅い甲羅だ。

「もう・・・無理だ・・・すまねえ、ピット・・・本部に帰還できなさそうだ・・・」

キンドルは自らの頭に銃を向けて、引き金を引こうとした時周囲の空間が震動し、ちりちりと焦げるような電流が空間一帯に広がる。

キンドルはその震動を感じ取ると、歓喜の叫び声を上げると銃に安全装置をかけて、長い尾を持つ奇獣系の魔物に貌を張り付かせてしまい行動できない、ピットに覆い被さるように伏せた。

陽炎のように揺れている空間から、炎の固まりが回転して出現し、射程座標位置番号

ほぼ正確に奇獣系の魔物と半獣系の魔物の後方頭上で、爆発音が響き、一瞬にして周囲の魔物らをうち砕き、吹き飛ばす。キンドルは熱風が背中の上をなめるように通り過ぎていくのがわかった。

そして、奇獣系の魔物と半獣系の魔物の臓腑や破片が降りかかってきた。

キンドルはゆっくりと起きあがろうとしたとき、もう一度爆発音が響いてきたので慌てて伏せる。

地面は大地震のように激しく揺れた。爆発音、魔物の咆哮と金切り声

それらが同時に聞こえてくる。

「（なんで魔術師課の戦友を怒らす様な事はしてはいけないか
理由はわかったぞ）」

キンドルは、そう思った。たしかに、こんなのを見せられたら怒ら
したらどうなるか・・・わからないでもない。
頭をあげたキンドルは、自分の目を疑った。

周囲にいた魔物の様子が一変していた。殲滅とまではいかないが、
大部分の魔物が爆風で吹き飛ばされたり、炎に焼かれたりしている。
生命力の強い魔物なためか、苦痛のあまり床をのたうち回っている
魔物もいるし、まだ戦闘意欲を無くしていない魔物が凍り付くよう
な咆哮を発していたりする。

「（魔術管制室より・・・「ハリコン」・・・魔術支援を終了した・
・状況を説明してくれ）」
ヘッドホンから声が聞こえてくる。

「「ハリコン」から魔術管制室へ、魔術支援は成功しているっ、
繰り返す、魔法支援は成功しているっ！！。支援魔法を実行して
くれた職員に伝言頼む。無事帰還したら酒でも飯でも奢るし・・・なん
なら、女でも紹介すると伝えておいてくれ！！」

「（魔術管制室より・・・「ハリコン」・・・わかった。伝えて
おく・・・以上。）」
ようやくほっとしたように息を吐いたとき、ヘッドホンから、掠れ
た声が聞こえてくる。

「（「戦狼」から「ハリコン」へ・・・そっちの周波数を傍受し
た・・・そちらの現状は？）」

「こちら「ハリコン」、現在魔術支援により、魔物の数は激変して
いる。職員一名は戦闘行動不能。
そちらの位置は？」

「（あと、3分で到着する・・・無謀な行動はすな・・・殉職す
る戦友の・・・姿はみたくない）」
掠れた声で、そう告げてくる。

「3分か・・・出来るだけ急いでくれ。以上」

キンドルはそう告げると、銃の安全装置をゆっくりと解除する。
闘いはまだ終わらない。

3話：脱出

ベルナルドとラインヴァルトは、現場まで3分の距離にいた。さして遠くはないが、薄暗い地下迷宮を移動するには、慎重に動かなくてはならない。

地下迷宮内には、迷宮内で棲息する凶暴な魔物だけに注意するだけでは生き残れる可能性は低く、

魔物と同じく警戒しなくてはいけないのが、迷宮内の落とし穴などの危険な罠を避けなくてはならない。

命知らずで英雄志願の冒険者らが、何も迷宮内の魔物との闘いで命を落としているばかりではないのだ。落とし穴などの危険な罠を避けきれず、朽ち果てる者もいるのだ。

「連合警備隊冒険者管理局遺品回収課」は、迷宮内の一部の落とし穴などの罠の存在場所は把握はしているが、全ての罠を把握しているわけではなく、職員も冒険者と同じく、落とし穴などの罠で殉職している。だが 「連合警備隊冒険者管理局遺品回収課」の職員は、凶暴な魔物と罠の他に、もう一つ警戒しなくてはならないものがある。

それは迷宮に挑んでいる、英雄志願で命知らずの冒険者だ。警備隊規律の一つに、「無闇に迷宮内で冒険者パーティーに接触してはいけない」という規律が決められている。

何かと衝突する可能性があるからだ。迷宮内の生と死の極限のプレッシャーで神経を尖らしている冒険者と、迷宮内で、命を落とした冒険者の遺品回収及び迷宮内で犯罪行為を行う冒険者の取り締まりを実行している警備隊職員 言い争いだけで終わるはずがない。

血が流れるわけないと、誰が断言できようか。そして、規律の中のもう一つには「迷宮内での魔物との交戦は禁止する」ものがある。

連合警備隊冒険者管理局は、冒険者の犯罪行為を摘発、捜査、冒険

者の登録管理、迷宮内で命を落とした冒険者の遺品回収するのが最優先の義務だ。ようするに、迷宮内や遺跡内の魔物との討伐などは英雄志願で命知らずの冒険者の仕事であり、魔物との交戦などしている時間などないと言っことだ。

迷宮内で魔物に遭遇すれば冒険者なら名声や金などを得るために、ごく当然の様に交戦するだろうが、
連合警備隊冒険者管理局の職員は、無闇に交戦しても名声や金なども得ることもなく、逆に規律違反に問われる可能性がある。

途中で幾つかの魔物と遭遇はしたが全て逃走した。だが例外もある。「ハリコン」の様に遺品回収中に魔物に襲われる事だ。その場合は交戦許可を本部に求めれば、状況次第では交戦許可は下りる。

だが、倒した魔物が隠し持っていた財宝などでの回収は禁止されている。回収するのは冒険者の遺品だけである。

激しい発砲音と金切り声と猛り狂った咆哮が、現場から響いてくる。その現場から、咽せるような魔物の肉片と臓腑の臭いに混じって、かすかにオゾンの臭いが漂ってくるのがわかる。そして空気が荷電を帯びている様に感じてくる。

オゾンの臭いと空気の荷電は魔術支援攻撃の影響である。

「状況通り、魔術支援攻撃を行ったようだな、ベルナルド」

ラインヴァルトは、何処か陽気な口調で尋ねてくる。

「しかし、油断はするな、ラインヴァルト」

ベルナルドは、掠れた声で答える。

まもなく2人の視界には、魔物の群れと1人で交戦している職員の姿見えてきた。その横には床に倒れ込んでいる職員の姿が見える。

「「戦狼」より本部へ、現場に到着した。現場には、未だに40体以上の魔物の大群が健在。交戦許可を要求する。繰り返す、現場には、未だに40体以上の魔物の大群が健在。交戦許可を要求する。どうぞ。」

ベルナルドは掠れた声で、ヘルメットに内臓されているマイクで本

部に交戦許可を打診した。

先ほども説明したが、警備隊冒険者取締局の規律には「迷宮内での魔物との交戦は禁止する」というものがある。正確に言えば、「魔物からの攻撃及び襲撃されない限り、支給されている兵器、魔法呪文、特殊能力の使用しての交戦は禁止する」である。

「（本部より・・・「戦狼」へ・・・要求を承認する）」
ヘッドホンから、雑音混じりの短い返答が返ってくる。

ベルナルドは、ラインヴァルトに何か言おうとしたが、次の瞬間にすぐ近くで、凄まじい轟音が付近に響き、銃口が火を吐く。迷宮の床から埃が舞う。遊底を起こして引き、薬室の空薬莖を抜いた。魔物の群れも一瞬、動きを止めた。

ラインヴァルトが、悪魔系の大型魔物専用の長距離自動装填方式特殊スナイパーライフルで、狙い済ましていた半獣人系の魔物の顔面が轟音と血煙と共に消失させたのだ。凄まじい威力である。

銃の反動もそれなりにあるはずだが、ラインヴァルトは微妙だにしていな

「ベルナルド、こっちは任せな。退路は確保しておくよ」

陽気な口調で、ラインヴァルトが答える。

「では任せたぞ、ラインヴァルト。地上に戻ったら「トリヤ」酒場で、酒を飲もう」

ベルナルドが掠れた声で告げながら

左手を前に伸ばす。

「戦友よ、そっちの店は冒険者の溜まり場だ。俺ら冒険者管理局の職員は、本部の大食堂か、酒場

「テフテフ」だ」

ラインヴァルトは、何処か呆れた口調で答えた。

だが、ベルナルドは答えなかった。その変わり、空間に歪みが発生した。ちりちりと焦げるような電流が空間一帯に広がる。空間が陽炎のように揺れて弾け、ぶれるような残像が一つの物質を結像させるまで、一瞬の時間もかかっていない。ラインヴァルトが銃を出現させた時間と同じだ。

そこに現れたのは長さ29・5cm ぐらいの一つの短刀が一つ現れた。ベルナルドは所持している銃器で交戦しないようだ。その短刀で攻撃する気だ。

ベルナルドはそれを掴むと、奇獣系と半獣系の魔物が身構える前に短刀を掴んで躍った。ベルナルドの手の短刀が光り、それが閃光のように走った。ベルナルドの動きに呼吸するかのように、魔物達の奇声と金切り声が、そして鮮血が気前よく空中と迷宮の床に撒き散らす。

奇獣系と半獣系の魔物の両眼を裂き、喉を切り裂き、肩を裂いて、胸を引き裂いていく。凄まじいほどの剣術の腕が展開する。上級以上の冒険者でもここまで自由自在に短刀を扱えないだろう。

そこまで言い切れるほど、ベルナルドの剣術技術は見る者を心底震え上がらせるものがある。もはや、神の領域だと言っても良い。

ラインヴァルトは、ベルナルドと交戦している魔物のグループには眼もくれずに、救援要請をしていた職員付近にいる魔物に向けて、速射を浴びせる。見事な速さで操作していく。龍、悪魔系の大型魔物専用のスナイパーライフルのその威力は、近距離では奇獣系と半獣系の魔物にはあまりにも

威力のある代物だった。血煙や骨片が、爆発したように飛び散っていく。

龍、悪魔系の大型魔物専用のスナイパーライフルの操作をなんなくしている彼の射撃技術も、到底他の冒険者が真似することもできないであろう。発砲時の反動が激しく、その衝撃からの立ち直ったの手動での次弾の狙いを付けるのにかかるの時間がかかる。それは銃器関係の武器に精通している冒険者や警備隊員でもだ。だが

ラインヴァルトは、自動銃の様な見事な速さで操作して正確無比の速射を浴びせるのである。この大陸でこの様な操作を出来る者は、ほんの一握りであろう。真似をしようとしても出来ないはずだ。

その様子を救援要請を求めたキンドルは、安堵したようにへたり込

み、心の奥から全知全能の神に感謝した。

「ベルナルドっ、戦友の付近にいた魔物を排除したっ！！」

薬室の空薬莢を抜きながら、ラインヴァルトが付近に響くぐらいの大声で告げる

ベルナルドは、奇獣系の魔物の頸を切り裂き終わると、そのへたり込んでいた職員にゆっくりと近づく。

「救援にきた「戦狼」のベルナルドだ。あつちで派手に発砲しているのはラインヴァルトだ。救援を求めた「ハリコン」か？、もう一度、手短に状況を言ってくれるか」

掠れた声で尋ねながら、短刀を持っていない手を差し出す。

「そうだ。「ハリコン」のキンドルだ。貌に奇獣系の魔物が張り付いていて行動不能になっているのが

相棒のピットだ。そっちが来る前に魔術支援要請を出して、一通り一掃してもらった所だ」

キンドルは疲れ切った声で言う。目出し帽を装着しているため表情はわからないが、かなり疲労していることだろう。

「通信で、救護班の待機は？」

床に倒れている職員の様子を一瞥しながら尋ねる。

「連絡済みだ。あとは、この糞つたれな場所から撤退するだけだ。

戦友」

ベルナルドはマイクで本部に通信する。

「こちら「戦狼」、聞こえるか本部」

「（「戦狼」・・・了解・・・どんな状況だ）」

雑音混じりの声が、ヘッドホンから聞こえてくる。

「現場で「ハリコン」を救援した。繰り返す、「ハリコン」を救援した。これより帰還する）」

「（了解・・・地上には救護班を待機させている。「戦狼」及び「ハリコン」は・・・帰還されたし・・・）」

「了解、以上」

ベルナルドは、長い尾を持つ奇獣系の魔物に顔面に触手でしがみつ

いて寄生されている職員を肩に担いだ。

「そつちは動けるか、闘えるか？」

ピットに尋ねる。

「動けない事はない。闘えないこともない」

静かに答えながら立ち上がる。

「動けるならいい。現場から離れるぞ・・・ラインヴァルト」

マイクで応答すると、スナイパーライフルで魔物に向けて乱射していたラインヴァルトが発砲を止めて、右手を軽く挙げる。

ベルナルドとキンドルは、行動不能のピットを肩に担いだキンドルを先頭に、ラインヴァルトがいる方向へ急いで走り出す。

ラインヴァルトは、2人が横を通り過ぎるのを確認して、アサルトベストから小型の薬品瓶を取り出す。

瓶の中身は、ゼリー状の液体が入っていた。

そしてまだ戦闘意欲が旺盛な魔物らの群れを一瞥する。その魔物の群れは少しずつ躍り寄ってくる。

「・・・悪いが、俺達はお前等とは交戦できない決まりなんだ。戦闘を楽しみたいなら 本職の冒険者とやってくれ」

そう告げると、小型の薬品瓶を魔物達の手前付近に投げる。床に当たって砕けた瓶からは、飛び散ったゼリー状の液体がドロツと広がる。

魔物達は一瞬立ち止まったが、襲いかかろうと向かってくる。

ドロツと広がっているゼリー状の液体に向けてスナイパーライフルを向けて、引き金を絞る。銃弾は火花を散らし、その火花が液体に燃え移る。

火は急激に広がった。これでしばらくは追いかけては来ないはずだ。その様子を一瞥すると、彼もその場から離れていく。

負傷した職員を担いで、ラインヴァルトとベルナルドは迷宮内を走った。

通路から通路へと走り、なるべく探索している冒険者パーティーや魔物と遭遇しないように、危険な罠に引っ掛かからないように慎重に移動する。

冒険者や魔物を発見すれば、素早く物陰に潜んだ。

彼等が向かっているのは、警備隊冒険者管理局専属の地上1階まで直通のエレベーターがある場所まで向かっている。

幾つもの通路から通路へと渡り歩き、できるだけ冒険者が探索する通路付近は避けて通り、ようやくエレベーターがある場所までたどり着いた。

しかし、エレベーターがある場所は、視界がまったく見えないダークゾーンの中なのだ。

何もその様な場所に設置しなくてもいいかもしれないが、これも冒険者との接触を避けるためだ。

今、彼等がいる場所は、ダークゾーンの外だ。

「ここまで来れば安全だ」

ラインヴァルトは陽気に良いながらヘルメットと目出し帽を脱ぐ。

黒色の頭髪と日焼けをしていた肌が現れる。騎馬騎士のような風貌で、二重瞼の眼、右側頬に、耳から顎にかけて細長い傷がある。その精悍な風貌のためか、それとも彼のおのずと発散する動物的なほどの、セックス・アピールの磁力に引き込まれるのか、女性には不自由はしないのだが、死別した妻を想ってか、何かと誘ってくる女性を丁重に断っている。

それに、しっかりとしている1人息子を故郷に残しているためだ。

「「戦狼」から本部へ、回収エレベーター付近に到着した。エレベーターを起動させておいてくれ。以上。」

「（本部より……「戦狼」へ……了解した……そのまま待て……）」

ヘッドホンから聞こえてきた雑音まじりの声を聞き終わると、同じく、ベルナルドもヘルメットと目出し帽を脱ぐ。

白色の頭髪で、白く透き通る肌が現れる。左の眼が海賊や盗賊が愛

用する黒い眼帯で覆われ、鋭く切れ上がる眼の瞳は、さすがに青みがかっている。繊弱な容姿をしており、威圧感や力感とは無縁に見える。彼も女性には不自由はしないのだが、彼は故郷に婚約者がいる。その婚約者は彼の出身地国の女性騎士団長だ　　浮気などできないぐらいの震えがくるような美人な女性である。

「相変わらずこのエレベーターは遅いな・・・」

とラインヴァルトが言いながら、負傷している職員の様子を見る。

「早く女性を口説きに行きたいからか苛ついているのか？」

ベルナルドは、掠れた声で真面目に尋ねてくる。

「・・・ベルナルドよ、笑えない冗談は、冗談じゃないんだぞ？」

ラインヴァルトは、何処かうんざりした表情で言う。

「事実ではないか」

「　　国で帰りを待っている婚約者がいるんだから、そんなこととは言うな。それと知らない人間が聞いたら誤解される」

「例えば、女性警備員と9割と肉体関係を結んだとかか？」

至って真面目に尋ねるベルナルド。

「それもだっ！！、何もかもだっ、俺には死んだ女房だけが最初で最後の女だっ、それと俺の息子の前では絶対言うなよ、え、おい」

何処が不機嫌に答えるラインヴァルト。

その様子をキンドルは見ながら言う。

「あー、話中すまないが、そろそろ地上に戻りたいんだ。俺の戦友の様態も気になる」

何処か申し訳なさそうに尋ねてくる。

「ああ、すまない、ベルナルドのこいつが馬鹿な冗談を言うからなあ・・・ベルナルド、後でその事でじっくりと説明するからな」

「　　婚約者に手紙を送りたいんだ。なるべく早く事実だと認めてくれ、ラインヴァルト」

「認める訳ないだろっ！！」

ベルナルドは、ラインヴァルトの抗議をあっさりとは無視すると、行動不能のピットを肩に担いだキンドルと共にダークゾーン内へと入

っっていく。

「まさか、あいつ、手紙にこのやり取りとか書くつもりじゃないだろうな」

ラインヴァルトは、何か嫌な予感を覚えて、彼等の後を追うように
ダークゾーンの中へと入っていく。

3話：脱出（後書き）

とりあえず、これで終了です。

駄文ですが、感想いただければ嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4184i/>

連合警備隊冒険者管理局遺品回収課

2010年10月15日20時15分発行